



受験シーズンですね。今年の医学部受験は、昨年明らかになった大学内部での操作問題が影響して、大変なことになっているようです。卒業生の子弟を優先させたり、性別や浪人年数を負の評価として反映させるなど、驚くような内容が明らかになるにつけ、いささかがっかりしたというのが社会の本音でしょう。今後は襟を正してきちんとした試験制度を構築して頂きたいと望みます。一方で今回の議論は、表面的な試験の公平さだけに終始しており、医学部受験の特殊性が忘れられている感じも致しました。臨床医に焦点を絞って、世間には見えづらいと思われる視点から、医師の倫理について私見を述べてみたいと思います。

日本における臨床医は、公私で言えば「公」の立場にあるように思います。例えば弁護士と比較してみましょう。弁護士になるためには、難しい大学入試を突破して、専門的な勉強を修得した後、更に司法試験に合格しなければなりません。ここまでの流れは医師も似ています。しかし、一人前になって社会で活躍するとき、両者は大いに異なってきます。それは国民皆保険制度のためです。日本の医療はこの制度によって成立しています。例えば三割負担の患者では、診療費の三割は自らの財布から支払いますが、残りの七割は皆で貯めた公的基金から支払われることとなります。つまり言うなれば臨床医はこの公的な貯金を預かる身にあり、その使い方を一任されているということです。恐らく法律の世界には一定の料金体系はあっても、それを公的基金から支払うという制度は無いと思います。したがって、臨床医が弁護士と異なるのは、常に公的な立場に在るという点になります。

公的な費用と言えば、そもそも医学部の学費についても一考を要します。今から40年程前に私は大学に入学しました。その時の国立大学の学費は年間18万円だったと記憶しています。一方、一人の学生を医師に育て上げるのに要す費用は、当時でも一千万円を超えてと言われていました。この金額は、かつての5倍に膨れ上がった現在の学費でさえ、到底賄える額ではありません。つまり医師を育成するためには、その費用の大半に税金が投入されているということなのです。この税金の意味を、医師は忘れてはならないと考えます。税金を使うということは、そこに社会の期待があると自覚しなければなりません。それは患者のため、社会のため、

そして国のために働いてもらいたいと、期待をかけられているということだと思います。税金は医師の個人的な功名心を満足させたり私腹を肥やすために投入されたものではありませんし、ましてや医師免許を持ちながら別の職業に就くなど言語道断、税金を返せと言いたくなります。

さて、ここまでの話を理解して頂くと、医学部入試の意味するところが見えてきます。皆様はこれまでのご経験の中で、医師の理不尽な態度や言動に不快な思いをされたことはありませんか。もしそのようなご経験があるようでしたら、医師としての人格が選ばれていなかった証左だと言えます。つまり医学部入試は、算数や国語の問題が解けるとか解けないとかの地平だけで判断されるものではないのです。将来社会のために役立ってほしいという期待を背負って、公的基金の使途を一任できる人物としての素因が求められるのです。医療の技術は経験さえ積みれば誰でも神業の名医になれる程度のものであり、ペーパーテストの点数はその技術に直結しません。むしろ倫理観のある人物が選ばれば、恐らく施術される医療も質の高いものになるに違いないのです。このような視座に立てば、医学部に合格するという事は、「今回はあなたにお願いしたい」という社会の要請として理解されなければならない、警察官や消防士等と同様に、むしろ低頭して拝受すべき任務と受け止められるように思えてくるのです。

冒頭に挙げた事例のように、受験に際して卒業生の子弟を優先させたり、性別等で理不尽な操作をすることは許されることではありません。しかし、きっちり点数配分を社会に公表して、コンピュータで判定するように人間の感覚を完全に排除した試験制度にすることも、同じように大きな誤りだと考えます。人物を見定めるということは、数値化できないことだからです。ではどうしたらよいのでしょうか。医学界には、内輪で問題解決を図ろうとする伝統的な悪習があります。それを打破する必要性を感じます。すなわち、公的な立場の人物を選ぶかぎり、同じような人間の集合体である医学部内の狭小な社会で試験を行うのではなく、歴史学者や各種の社会学者、あるいは哲学者などに面接試験に参加して貰うことが必須だと考えます。自省を込めて申し上げれば、学際的教養を失った現代の医学界では、残念ながら人物を選ぶことは出来ないように思えるからです。